鯨と別府湾

安部　巌

(一)概観

鯨①がどの程度日本近海に来遊したかは別として、戦国時代既に、紀伊、長岡、土佐、肥前等ではかなり突取法による捕鯨が行なわれていたが、江戸時代万治寛文頃以後になると網取法と突取法とを併せた捕鯨が主として西日本（紀伊、長岡、九州西北海域）で盛になり、江戸末に及んだ。その頃の紀伊大地浦のもようについて清光昭夫氏は

〃第一段階から、第二段階に移る間の捕鯨業の最盛期には、大地浦の如きはこれ迄の民家二百五十余戸が一躍数百戸もより、紀洲藩においても、捕鯨業を奨励して、寛文四年快速の捕鯨船を建造し、古庄浦に鯨方役所を設け銛網一切の漁具を備えて、常に三百人の漁夫を養い、米三百石を付せられた〃

と記し、捕鯨業がかなり大規模に行なわれていたことを述べておられる。このことは、とりもなおさず、西日本の外海で大規模に捕鯨業が行なわれたことを意味するものであろう。

ところが、瀬戸内海沿岸では、餘程その趣が違っていたようで、鯨の遊泳がすくなかったため魚業は専ら沿岸漁業の域を出なかったもののようである。

扨て捕鯨は、別府湾ではどのように行なわれていたのであろうか。諸種の史料を総合してみると、組織的に捕鯨をする魚民はなかったと考えるのが妥当であろう。以下別府湾における鯨魚業について二、三気付いた事を述べてみたい。

註①鯨・古来勇魚、伊伊、久知良等と書き、イサナ、イサナ、クチラ等とよんだ・・・・・・清光昭夫氏・魚業の歴史
・鯨魚　ケイギョ(一)クぢら(二)しゅもく、撞木

後漢書　註「海岸中有ニ大魚一名レ鯨、又有レ獸名二蒲牢一、蒲牢素畏二鯨魚一、鯨魚撃二蒲牢一、蒲牢輒大鳴、凡鐘欲レ令其声大一者故作二蒲牢（リユウ）於其上二撞レ鐘名二鯨魚」（シユモク）

。鯨　ゲイ、ケイ、キヤウ、クヂラ、魚の王

古は魚類と見たる故に魚編、京は京符一説に雄を　といふ　（大辞典）

◎昭和三十三年九月十日清光昭夫氏漁業の歴史　玉文堂

㈠別府湾の漁法と鯨

別府湾に於ける魚業に就て近幸雄氏は、その稿本で

〃今を溯る約三十年前、別府、浜脇の両町の合併前戸数二千数百を算する時代、海岸一帯は　戸蟹舎相連り、漁家玆に水産物製造業者を充され、沿海の砂浜は、唯一の乾燥場たり、四極山の中腹には、所謂魚見臺あり。鎌崎沖の深海に、鮪、鰤漁獲の大敷網を敷設し、一度び魚群の進入を見るや索魚臺上二条の長旅を、揮一揮もして魚群の襲来を報じ、満を持して放たむずる海岸一帯の漁船は、宛かも指の譬に応ずるか如く、櫓声伊軋として大敷網に集るを例としたり。壮観想ひ見るだに、血湧き肉跳るを覚ゆ、若夫漁獲饒多なれば、満船の漁夫は、宛かも凱旋将軍の如く、筆頭襤褸衣を掲げ浮標樽を叩いて歓呼喧喚して還る。海岸には老幼婦女喜んで之を迎へ、　火は炎々として、水心に万燈を点じ来る。やがて三十貫、乃至四十貫を量る巨大の鮪、鰤、大網敷の殆んど廃絶したる今日に在りては、単に過去の一夢に過ぎざるや〃と

名文をもって記されているが、それは、あくまでも、別府湾の漁業が沿岸漁業であり、大魚に湧く漁師の喜びを表現し漁師達の漁業への工夫を示すものと受け取る事は誤りであろうか。

兎もあれ、別府湾における漁業が、室町、江戸期を通じて専ら沿岸魚業を主とするものであった事は、武内文書等によってあきらかであり、その魚種はアジ、サバ、カレイ、チヌ、イカ、キスゴ、タチ魚・・・・・・（以下略）等であったが、時として大量のブリが水揚げされる事もあった。（浜脇糸永フジ氏談）勿論佐賀関漁民の間では洋上漁業がかなり行なわれていたようである。而して別府湾沿岸魚村に於ける漁業構造は、もとあみ、あみもとの下に幾人かの漁民がおり共同経営の形態をとって

いるものであり、捕鯨業は殆んど行なわれていなかったとみるのが温当であろう。

その事は、帆足万里の肆業餘稿に

〃近世佐賀関　有ニ一異魚一見　長可ニ二三丈一　頭以ニ斗鶏冠一　去レ頭一丈許　有如時々鳥吼　漁人始懼　不ニ敢入一海　後益習レ之　以ニ其絶不レ為レ害　稍得ニ近視一風月餘乃不ニ腹見一

とある。この記録によると、当時佐賀関附近の漁法はかなりすすんだ洋上漁業を営んでいたのに〃一異魚あり〃とか、〃漁人如懼不ニ敢入ニ海〃等と記されている事から察すれば、別府湾に入る鯨の数はすくなかった事が理解できる。だから海辺の漁師達が鯨を見ておどろいたのも無理のない事である。然し其後鯨はあまり別府湾に入る事がなかったらしい。

㈢捕鯨

	年代	場所	種類	大きさ	状況	出典	其他
1	江戸末	佐賀関	不詳（鎮鶏冠状）	二、三丈	鳴吼・漁民恐遊泳	帆足万里肆業餘稿	萬里全集所収
2	明治十七年	大分海岸	不詳	不詳	捕獲	現聞日誌	
3	明治二十三年	別府海内寺	不詳	四間	見物人多し捕かく	〃	
4	明治三十三年	日出海岸	不詳	七間	捕かく	〃	
5	大正二～三頃	別府石垣	ツチクジラか	六間位	捕かく市場に売る	写真古老談話	・張あみにかかる ・荒金進氏、豊島氏写真所蔵

さて別府湾に於ける捕鯨はさきに述べたように、遊泳する頭数がすくなかったために盛行せず専ら沿岸漁業にたよっていたが、全く捕鯨が行なはれなかったのではない。時折り来遊するくじらを追って、漁師の間に、大捕物陣が展開されていたようである。

散見される、二三の史料をもとにして、その状況を記してみると、前頁の表となる。

（参考）ツチクジラ・・・・学習国解百科
ハクジラのなかま。イルカ類もふくめるが、クジラとよばれるものにはマッコウクジラ、アカボウクジラ、ゴンドウクジラ等十種程ある。このなかまには歯があり、イカやタコをこのんでたべる。ふつうむれをつくって生活する。

右の表の如くなり、鯨の捕獲、遊泳毎に、別府湾沿岸町村民衆がおどろきの目を持って鯨を見つめている事が察せられて興味ぶかい。

特に佐賀関附近の海上に、鯨があらわれた時の漁民のおどろきは、さきに記したように帆足万里があますところなく記しているが明治十七年の大分でとれた鯨の事が石垣地区の日誌に記されていたり、明治二十三年の別府海内寺で捕かくされた鯨については「見物人多し」と記されている如く、わざわざ石垣民衆が見物に行った事等、鯨が別府湾沿岸では珍らしいものであったことを示すものであろう。

ついで明治三十三年日出沖で捕獲された鯨に就ては現聞日誌に〃明治三十三年九月十七日、日出ニ鯨トリ長サ七間余有〃と記されているだけであり詳細を知る事ができない。

ところが大正二、三年頃石垣海岸で捕獲された鯨については、かなりくわしく事情が判明している。これについて北石垣南須賀佐藤氏は実見者であるが、その語るところによれば、

『石垣海岸に鯨がとれたのは、大正二、三年頃の事だったと思う。石垣を西から東に流れる春木川の南に明神川というのがあった。その頃は、よくこの附近の海上に張網（ハリアミ）をして雑魚（キスゴ、アジ、サバ、カレイ、チヌ、イカ、キッ

チョイカ、タチ魚等）をとっていたがタチ魚等は、時によって船が沈む位択山とれたこともある。

鯨がとれた時は、明神川口から三段に張網をしてあったが漁師が海に行ってみたら一番沖の三番目の網に鯨が、かかってウロウロしているので、漁師はおどろき、網をはずして鯨をがんじがらめにあみでまきつけたたいたり、きづつけたりして、くたびれて死んだところを岸辺まで引き寄せ波打ちぎわにおいた。

その時私達は、知らせをきいてかけつけてみると、写真で見るような大きな鯨が水辺に引き寄せられていた。見物に行ったのは、南須賀の人二、三〇人だったように思う子供も何人かいた。

その時、大人の人が鯨をはかっていたが大きさは大人の手で七尋（六間位、約一〇米）位もあり、初めてみる鯨だったのでおどろいた。鯨には、大きなセビレがあり、口には歯があり、口はいくぶんとがっていたように思う。それからどうしたかよく覚えていないが、漁師の人が船でひっぱって、別府の魚市場に売りに行ったが、餘り高くは売れなかったらしい。どの位に売れたかは知らないが、くわしい事は村田さんがよく知っているかも知れない。』

と語ってくれた。

（四）　まとめ

以上別府湾における鯨漁業に就て、その概況を記したが、以上の外にもまだかなり多くの鯨史料があるものと思う。更にそれ等を探索し研究を深めてみたい。読者の教示を願い度い。

（別府市立石垣小学校教諭）